

和紙は、紙漉きの場所だけで生まれるものではない。

和紙づくりには、紙を漉く技術だけでなく、原料となる「楮」を育てることも欠かせません。良い和紙をつくるため、楮の栽培に取り組む人がいます。

和紙は、紙漉きの場所だけで生まれるものではない

皆さんは、和紙の原料となる楮をご存じですか。和紙の原料として使われる植物はいくつかありますが、東秩父村で漉かれる和紙には、クワ科の植物である楮が使われています。

「もともと紙が好きで、和紙を漉く中で原料の楮にも興味を持つようになりました。手漉き和紙と、その原料である楮の魅力を多くの人に知ってもらえたらうれしいです。」

そう語るのは、楮の栽培にも力を入れている、細川紙・大河原和紙技術者研究生の中野晴実さんです。

楮の一年を追う

楮は、1年の時間をかけて栽培から加工までを行います。

①春－芽が出る

春ごろから、楮の木から芽が生え始め、大きく幹へと成長していきます。

②夏・秋－大きく育てる

春先から成長した楮は冬までに約3～4メートルに成長します。夏は、間引きや芽かき、草刈りを行い、質の良い楮を収穫できるよう手入れをしています。

「夏は芽かきをして、枝が出ないように一本の幹にしていきます。草刈りも頻繁に行うので、一年で一番大変な時期です。」
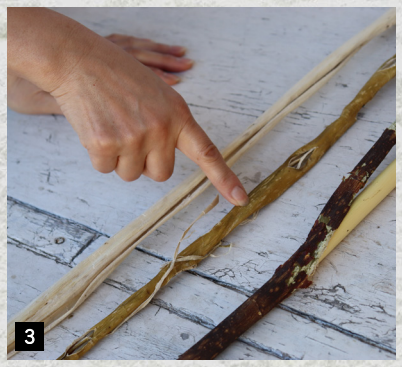
③冬－収穫と処理

葉が落ちる12月頃に楮を収穫し、蒸して表皮をむいた後、黒い外皮を取り除き、撫皮楮または白皮楮にします。

楮を育てる作業は、完成した一枚からすぐに見えるものではありません。それでも、原料がなければ和紙はつくれません。これらの作業が、紙づくりの土台を支えています。







1 「春」の楮
2 「夏・秋」の楮
3 楮ひきの見本
▶ 一番左の白い皮が細川紙の原料になります。



中野　晴実さん

細川紙・大河原和紙技術者研究生として市村さんと同じく７年目を迎えました。和紙を漉く技術を学びながら、より良い和紙づくりに欠かせない楮の栽培にも取り組んでいます。